動物の診察室から
○16○

猫を捨てる人たち
まず不幸なくす努力を

柏崎市のHさんは息子さんが生まれた日、病院に面会に行った帰り道で、ごみ捨て場から何かの声がするのに気が付きました。近寄ってみると、黒いごみ袋があり、袋を開けると中には生まれたばかりの子猫が二匹みゃーみゃーと鳴いていたのです。Hさんは自分の子供が生まれた日でもあり、どうしてもそのままにしておけなく、かといって連れて帰っても育てられるのか、ほかに飼ってくれる人はいるのだろうかと悩んだそうです。結局、特別に猫が好きだったわけではありませんでしたが、家につれて帰り人工哺乳で育てました。一匹は知人にもらってもらい、もう一匹は自宅で飼うことになりました。名前は「サスケ」。サスケは名前の通りに活発で、ネズミを捕まえては、得意げに玄関に持って来るそうです。

猫を捨てる人たちは、その捨てられた猫たちにかかわる人が、その子猫たちを何とかしようと大変な努力をし、そして、どんなにか心を痛めているかを考えないのでしょうか。

新潟市で、年間保健所に収容される猫は約九百匹です。そしてそのほとんどが安楽死させられます。収容される猫たちは子猫が多く、その子猫を、もらってもらえるまで育ててすべて譲渡することは不可能ですので、生まれたばかりの子猫たちを安楽死させるのは仕方のないことです。しかし、そのような不幸な子猫たちをなくす努力はしなくてはいけません。子猫を望まない場合には不妊の処置をしてあげましょう。

保健所から来たかわいい子猫

東京都はほとんどの区で、猫の不妊助成を行っていますが、残念なことに新潟県内で行政が猫の不妊助成を行っている市町村は一つもありません。新潟市でも現在はその制度はありませんが、飼い主不明の外猫に不妊助成を行えるように、検討をしてもらっているところです。

先日、子猫を連れた方が来院されました。その子猫は保健所からもらってきたそうです。その子は幸いにもその方に命を救われ、幸せな生活を送ることになりました。県内の保健所には年間多くの動物が収容されます。猫や犬を飼おうと思われる方は、ぜひ保健所に問い合わせてみてください。そして一匹でも多くの動物たちの命を救ってあげてください。

草村　正人（獣医師・新潟市）

＝毎月第2・4木曜掲載＝

くらし